

コーヒーブレイク



ゴールを待ちわびた子どもたちと。右側が筆者

チーム勝浦結成！

会員 水落 一隆 (49期)

「そうだ、来年のGWに自転車で勝浦に行こう！」それは、2008年の忘年会でのドクターの一言で始まった。「それはいい。行こう！」と乗り気な証券マン。こうして、チーム勝浦は結成された。

ルートは、世田谷区から神奈川県の大磯まで走り、東京湾フェリーで千葉県に渡り、房総半島を横断し、外房の勝浦に至る、走行距離約120キロの道りである。日頃通勤で片道35キロを走っているドクターと、20代の頃カナダで6週間の自転車旅を完走した証券マンは、やる気満々である。私はといえば、ドクターに勧められ、通勤用のマウンテンバイクを購入したものの、さぼりにさぼった2008年を後悔していた。

練習を開始したのは、すでに4月になってからだった。通勤では片道15キロでへばっていた私だったが、4月19日のチームの合同練習で世田谷ー横須賀往復100キロを走り、何とか1日で勝浦まで辿りつけるのではないかという気持ちになっていた。

5月2日日本番当日、見事な晴天である。朝6時、環八瀬田交差点を出発しようとしたとき、証券マンが折りたたみ式の三脚を取り出し、自動シャッターで最初のチーム写真をパチリ。10分遅れで出発する。環八から国道1号を右折し、20キロ地点の鶴見のデニースで朝食を摂る。横浜で国道16号に入り、10時20分に60キロ地点の大磯に到着。自転車と共に念願の東京湾フェリーに乗り込み、一番上のデッキに陣

取る。燦爛と照りつける春の日差しと心地よい潮風がひとときの開放感を与えてくれた。

あっという間に内房の金谷港に到着。港近くの回転寿司に入る。とても旨い。気を引き締め直して、後半の60キロに臨む。内陸を走る県道に入ると、景色は午前の都会ルートとガラッと変わって、5月の新緑に包まれた山林と田植えの終わったばかりの田んぼが続く。蛙が陽気に歌っている。しかし、想定していたとはいえず、ここから長い上りが続く。太腿にみるみる乳酸が溜まり、息が切れる。車で下見をしていた証券マンの「あともう少しで上りは終わり。」という声を信じて、ひたすらペダルを漕ぐ。上りのエキスパートのドクターがチームを盛り立てる。幸い追い風である。やっと上り切ると、今度は長い下りをかっ飛ばして一気に走る。勝浦までの距離を示す道路標識に勇気付けられ加速する。3時30分には勝浦市内の海岸に到着し、ゴール地点で待つ家族に電話する。家族は証券マンが持っていたGPS付の子どもの携帯でチームの所在地を確認していたらしい。あともう少しなのだが、最後に地獄の上り坂が続く。やっとの思いでゴールすると、子どもたちが折り紙の輪をつなげて作ったゴールテープを持って待っていてくれた。シャンパンファイトの如く、ペットボトルの水をかけられた後、子どもたちと一緒に撮ったのが上の写真である。

チーム勝浦は、今年の秋、また出発する予定である。